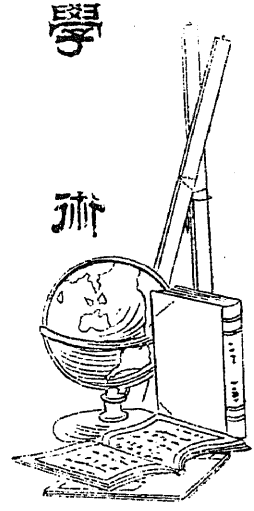

夢のはなし

東基告

若し詩的、文學的に夢といふものを解釋したものなら、夢はいかにも、趣味の深い題目である。

夢の當にならない所、如何にも轉變の計りかたい所からして、厭世的の人々は、人世の浮沈啻ならぬに持って來て、世は夢の如しだと例にした。古は莊周といふ人、夢に胡蝶となって、覺めてから自分が胡蝶か、胡蝶が莊周かも疑ったなどは、頗る興味のある話しではあるまいか。

山海萬里を隔てゝ、日夜戀し懷しとばかり、とても顏も會はす事など出來まいと諦めた親しい友垣とも、夢には眞實相見て物語ることも出來る。だから、古の戀愛詩人なども「夢てふものを賴み初め」たり、衣の裏を反して寢たとも、歌ったのである。

あはれ、杖とも柱とも賴んだ夫に前き立たれてからは、ある甲斐もなくて、生活へ居る貧しい、寡婦も、夢には夫と共にありし昔に歸ることも出來る、よし覺めての後の涙となり果つるにしても。

あらゆる罪を侵して、不義の榮華に誇って居る者も、夢には、此世からの地獄に陷るを免るゝことは到底出來ない。

若し、毎晩夢見ることが、出來れば、つまり其

人は、他の人よりも、一倍長く自分の生涯を暮す樣なものである、何故かといふと、夢を見ない人は、眠って居る間は言はゞ死んで居るのも同樣であるのに、自分だけは、其間絶ゑず活動いて居るからである。

こんな具合に夢を考へて見たり、又昔からよく言ふ通り、夢のお告げだとか、靈夢に感じたとか逆夢だとか、正夢だとかといふ樣なに夢を見ると夢といふものは、如何にも面白い、樂しい、有りがたいものであるが、若し科學的に解釋したならば夢とは果してどんなものであらうか。

そこで、夢を眞實解釋しやうと思ふが、夢は、吾々の眠ってる中に起るのであるから、先づ眠りといふ事を考へねばならぬ。

睡眠　眞實に吾々が睡った時は、丸で死んだと同

然吾々の心は一切働かない。生理的即身体の方からいふと、血液の循環とか、内臓の活動とかは著るしく緩慢になる。心理學的の方面から見ると、心は一切無意識の狀態即一切考へなしである。

從って一寸した外部の物事には中に氣が附かない此樣な睡眠は、吾々の身体精神を休息させるには頗る必要なのである、徹夜をしたり、睡っても寢られなかったりした朝、身体の具合がわるいのは、誰でも知る處であらう。處が、吾々は夜床に付いても、すぐ眠って仕舞はない、殊に甚く心配したり勉强でもしたりして、直ぐ床に入ると、容易に眠れない、で、通例睡眠は次の順序を取るものである即眠氣から起って、眠付、熟睡、半睡、醒覺といふ具合である。

夢を見る時。熟睡の時といふのは、全く夢も何も

見ない、其最も多く見るのは、通例半睡の時、即精神がボーッとして、今暫らくすると睡た目を摩つて醒覺めやうといふ時である、最も睡付きの時でも見る、又熟眠の時でも或學者などはそれは、全く夢を見ないのではなくって、見ても忘せて仕舞ふのだといって居るが、先づ通例は見ないものとして居る。だから、夜中夢を見てるのは、取りも直さず熟睡しないといふことで、前に述べた樣に樂天的に考へれば兎に角だが、衞生上にも不可けなければ、精神上にも頗る不可けない、何故かといふに身体は横になって居ても、精神は一向休まないで働いて居るのであるから。つまり寢て居ても、起きて居るのである。

夢の原因　そんなら何故夢を見るかといふと、夢を誘ひ出す原因の最も普通なのは、内臓の具合、即呼吸器とか胃とか、心臓とか、腸とかの具合が平常と異なって居るといふと、夫からして起る。食べ過ぎて腹が苦しくって寢ると大抵夢に襲はれない事がない、夫から腦髓の疲勞である、余り心配して眠ると夢を見る。夫から睡眠中に音がしたり、身体に何か觸たりするとこれも、夢を起す原因になるのである。

（未完）

露の色及虹

京都　圖南子

露か呈する色及虹の事につきて御話をするには先つ光の反射、光の屈折、光の分散と云ふことにつきて一應説明をしなければなりませぬ。

一圖に示すか如くまりをイロの如き垂直の向きに壁又は板に投げつけますれば、まりはイロの向き